



革命列車と新生アラブ - 国難にて日本の存在感 -

著者	アルモーメン, アブドーラ
雑誌名	明治学院大学国際学研究 = Meiji Gakuin review International & regional studies
号	43
ページ	35-48
発行年	2013-03
その他のタイトル	A Revolutionary Train and the Arab Spring
URL	http://hdl.handle.net/10723/1314

【報告2】

革命列車と新生アラブ

——国難にて日本の存在感——

アブドラー・アルモーメン

はじめに

「変革」の意味するところは必ずしも「進歩する」ということではない。つまり、「変革すること」と「前へ進むこと」はセットではないということである。時には、後退するという意味合いを持つこともある。屁理屈に聞こえてしまうかもしれないが、私が言いたいのは、物事の変化＝物事の前進という単純計算ではない。

2011年、それは、間違いなくアラブ世界の変革を象徴するものだと言えよう。

チュニジアから始まった民衆デモは、エジプトへ飛び火し、その後次々と近隣のアラブ諸国へと広がっていった。独裁政権の退陣を訴えながら「国民は今の体制を倒したい」と叫ぶ国民の声は止まなかったのだ。若者や年配者、学生やサラリーマン、女性や子供、家族連れの人、エジプト各地から殺到する群衆はだれにも止められない・・・人びとは長きにわたる独裁政権にNOをつきつけ、民主的な社会を求め立ち上がったのだ。いわゆる、アラブの春の到来なのである。

命を掛けてまで戦い、変革を求めている民衆を見て、私は思った。あの革命の意味は何か？国民は何のために戦い、立ち上がったのか？あの革命はみんな自らの尊厳を守るためのものであった。これは尊厳をかけた革命なのだ。

国民が革命で勝ち取ったものは何か、またこれから達成しなければならないことは何か。国民は

確かに独裁体制を作っていた、トップを倒したものの、腐敗や独裁体制は依然として倒れていないままである。つまり、蛇の頭は切り落とされたものの、体の方はまだ動いているといった感じだ。さて、現実には、エジプト国民がこれまで叫び続け求めていた「体制を倒したい」との要求とは程遠いものである。革命の改革列車はどのように進められていくべきか。国民から厳しい目を向けられる「イスラーム主義政治」の果たすべき役割は何か、人々のアイデンティティへの影響、日本との関わりなどの諸問題を考えてみたい。

1. 見えない背景とその影響

一つ言えるのは、アラブ地域で雪崩のように民主化運動が波及するというのは、実は今回がはじめてではないということ。50年代のナセルによるエジプト革命が起きたときも、周りのアラブ諸国はその影響を受けて動きが活発になっていた。つまり、これはとてもアラブらしい現象と言える。隣国の人々の困難を共有するというか、困難でつながることがアラブ人のアイデンティティの一つの特徴だと言えるかもしれない。今回もそれがかなり鮮明に現れている。

基本的にアラブ人は安定を好む民族なのだが、世代交代という流れの中で「安定はどうでもいい」という若者が非常に増えているのも事実。今回の動きは、間接的にせよすべて独裁体制が原因であって、いろいろな状況が重なったなかで、安定を好むアラブ人、とりわけチュニジア人やエジプトでも、自分の力で何か行動を起こさないと生き

ていけないという状況になっていたのだと思う。

もう一つの注目点となるのは、情報空間という点である。エジプト一国だけをみてもいろいろな階層がある。上流、中産階級、下流もあり、他の国も同様だと思うが、大体同じ層の人としか付き合わない。けれども、ネット上では相手の階級を気にしなくて良い。いろいろな階級の人と議論できるわけだし、その意味ではネットは、アラブ人にとって重要な言論空間となる。バーチャルに、国を超えて議論ができる場が、すでに日常のものになっていたのである。

若者はこの革命が起きる前から、そして起きた後も常に携帯を持ち、友達と日常的にチャットをしていたり、最新のニュースを常に追っている。こうして情報交換が非常に活発になる中で、例えばエジプト人が、ヨルダン人のいま抱えている問題をネット上で知ることもできる。つまり、問題はエジプトだけにあるわけではないという意識が高まったわけだ。独裁はエジプトだけではなく、どこのアラブ諸国にもあるということに気付いた。そのエジプト人の不満に拍車をかけたのが、国際社会、例えばアメリカの民主主義を口では言いつつも非民主的なムバラク政権を尊重するダブル・スタンダードともいえる姿勢である。したがって、政権に対してだけでなく国外に向けても非常に不安が高まっていた。

エジプト、リビア、チュニジア、シリア、ヨルダン等、1970年代からそして「アラブの春」という現象が起きるまでに、中東アラブ諸国一辺の支配政権では、親米独裁政権がほとんどだった。だから、アメリカは、アラブ中東諸国の西側陣営の内輪もめが起きないように、これらの国の独裁政権に圧力を掛けながら、間接的だといえども、独裁体制を政治経済両面で手厚く支援していた。そして、当然のように、中東アラブ諸国の多くの国の独裁政権は、後ろ盾としてのアメリカを活用しながら、自分たちの独裁支配をより一層に固めていた。

2. 「～共和国」から「～イスラーム主義国」へ

今回のアラブの春によってもたらされたアラブ世界の劇的政変では、国によって事情がいろいろと違うにしても、イスラーム主義の勢力が飛躍的に拡大したのは言うまでもない。ベンアリ政権が倒れたチュニジアでは、2011年10月に行われた制憲議会選（定数217）でイスラーム主義政党の「ナハダ党」が90議席を獲得し第1党となった。そして、選挙結果を受けて、12月23日にナハダ党のジュベリ首相を首班とする暫定内閣が発足した。他の世俗派政党との連立政権ではあったが、ムスリム同胞団の流れをくむナハダ党が主要閣僚を占め、チュニジアの政治はナハダ党を中心にして動くこととなった。

一方、革命列車の2番目乗車となったエジプトでは、人民議会の選挙が、昨年11月末から今年の1月後半まで3段階に分けて行われた。その結果は、定数508議席のうちイスラーム主義政党でムスリム同胞団系の「自由公正党」が全議席の47パーセントを占める第1党となり、第2党はイスラム原理主義勢力「サラフィー系」のイスラーム主義政党「ヌール党」で25パーセントとなった。その他のイスラーム主義政党と合わせると全議席の75パーセント前後はイスラーム系政党で占められたことになる。結果的にはイスラーム系政党の圧勝となった。しかも、イスラーム主義勢力の勝利はそれだけではとどまらなかった。1月から2月にかけて行われたエジプトの上院に相当参議院議会の選挙でも、「ムスリム同胞団」の自由公正党と「イスラーム原理勢力」のヌール党合わせて、全議席の85パーセントを手に入れ、結果的には、こちらもイスラーム系政党の圧勝となった。

その他のアラブの春が到来した国では、今年7月に、カダフィ政権崩壊後の制憲議会選が行われた結果リビアでもイスラーム主義者たちの影響力が伸びている。リビアのムスリム同胞団とイスラーム主義者たちは、新党「正義建設党」を設立する

ことを決定すると共に党首としてカダフィ政権下では政治犯として投獄されていたムスリム同胞団の指導者ムハンマド・サワン氏が選出された。

そして、リベラル系の「国民勢力連合」は、政党割り当て分 80 議席のうち 39 議席を確保した。そしてムスリム同胞団の政党の「正義開発党」は 17 議席で第 2 党となった。しかし、イスラーム主義勢力とそれの軍に対する影響力が今後のリビアの政治動向に大きな影響を与えるものと考えられる。

また、アラブの春の波は及ばなかったが、アルジェリアの政界の動向を見てもイスラーム勢力の勢いは一向に衰えない。アルジェリアでは、ムスリム同胞団系の政党が独自の色を強めながら、2004 年以来連立政権に参加し一定の影響力を維持してきたが、今年に予定されている議会選挙ではイスラーム主義の勢力が議席を増やすものと予想される。

3. アラブの春とアイデンティティへの影響

アラブの春にもたらされた変化は様々であるが、アラブの春、ときに「アラブ人とは何か」について考えさせられる場面も多い。

通訳という立場で、アラブや日本の多くの首脳や要人に出会う。数年も前にパレスチナの「アッバス議長」の通訳を担当したときに、こんなことを本人に聞いてみた。

「アラブ世界が一つになる日はやってくるのでしょうか？」

答えは、「それができるには、ある必須条件があります。それはアラブ人たちが自ら、自分たちがアラブ人であると自覚することです」。その言葉は今でも耳に残っている。

2005 年の NHK 教育テレビ「アラビア語会話」で、生徒役を務めた柳家花緑さんと、こんな会話を交わす場面があった。

「エジプト人、イスラーム教徒、そしてアラブ人という三つのアイデンティティをもし順番に並べるのなら、モーメンさんは、どの順番

で並べますか？」

たしか私はこう答えたと思う。

「1、イスラーム教徒。2、アラブ人。3、エジプト人」

しかし、あとでよくよく考えてみると、この三つのアイデンティティをランク付けして並べることは決して賢明なことではない。この三つは重なり合うもので、順に並べるものではないからだ。

一人の人間がもっているアイデンティティは一つではないと思う。きっと複数のもので、重層的な構造でできているに違いない。

たとえば、数十ピースに及ぶパズルを組み合わせて一つの絵にするには、適切な場所に適切な部分を入れなければならない。アイデンティティにも同じことがいえる。

「イスラーム教徒」と「アラブ人」と「エジプト人」から自分のアイデンティティができていくという単純な構造ではないと思う。また、アラブ世界も一様ではない。絵を組み合わせるのに必要なパズルの大きさや色合いなどが、アラブ諸国によって多少違うだろう。しかし、最後に出来る絵は間違いなく、アラブの世界そのものである。

アラブ人が考えるアイデンティティには、次の 3 種類がある。

- ①民族的アイデンティティ……全アラブ世界の一員としてのアイデンティティ。
アラブ人は、arabi（アラビ＝アラブ人）としての誇りや、ほかのアラブ人に対する同胞意識を強くもっている。
- ②地域的アイデンティティ……国民の一人としてのアイデンティティ。
たとえば、マスリ（エジプト人）、スウーディ（サウジ人）など、自分の国籍に対して強い誇りをもっている。
- ③宗教的アイデンティティ……イスラーム教徒としてのアイデンティティ。
これは国境や肌の色や民族の違いなどを超えたアイデンティティ。相手が同じイスラーム教徒であれば、同胞となるし、また、イスラームを国教とする国であれば、その国やその国民に対

する親近感を感じる。もちろん、キリスト教徒も、キリスト教徒としてのアイデンティティをもっている。それは、イスラーム教徒と同様に、国境や肌の色、民族などを超えたものだ。

アラブ人は、これら三つのアイデンティティを潜在的に抱きながら日々暮らしている。どれを強く意識するか、どれが優先されるかは、その人の育った環境や時代、受けた教育などによって大きく異なる。

今回のアラブの春がもたらした変化の中で特に目立ったのは、宗教的アイデンティティの部分である。イスラーム主義勢力はイスラーム教徒という宗教的アイデンティティに煽りを掛けながら、支持層を最大限に拡大させることに成功した。その典型的例となったのはエジプトである。言うまでもないが、アラブ社会では、宗教は人の生涯にわたってなくてはならない存在として、人生観、結婚観、仕事や子ども、人間関係、近所づきあいなど、人々の人生やその暮らしのあらゆる場面の行動規範となる。さらには、宗教は科目の一つとして学校の授業に組み入れ、アラビア語はイスラーム的発想の表現で溢れている。言葉だけでなく、服装やアクセサリ、家の飾りなどにも宗教が色濃く現れる。とにかく、アラブ社会では宗教の跡がどこにでも見られる。

そして、やはり選挙も例外ではなかった。宗教の影響が至るところにあったのだ。国民も、それに応えるべく、自分がこれまで形成してきたアイデンティティの優先順位で、国の未来を左右する政治への選択肢を選ぶ・・・という認識パターンが人々の間に支配的となった。そして、抑え込まれていたイスラームという宗教的アイデンティティの部分が増出し、「民主化」と「イスラーム化」という、一見相反する現象が同時進行することにもなった。アラブの春とその行方を巡って、アラブ世界と西洋世界のそれぞれの思惑は違っていたようである。当時アラブの春が起きた時、西洋世界の誰もが「民主主義」を連想した。だが、イスラーム勢力がすぐに想像したのは、イスラーム社会の実現だった。西洋世界とアラブイスラーム世

界とでは、目指すべきゴールは違っていたようである。西洋世界にとってのゴールは民主主義そのものなのかもしれないが、イスラーム主義勢力にとって、「民主主義」は「プロセス」であっても、ゴールではないのは明らかである。**ゴールはイスラーム社会の実現そのものである**。これは、西洋とイスラームの両世界の決定的な断層となる。

今、アラブの春が到来した国々は、民主主義とイスラームの思想を柱に、かつての栄光を取り戻そうと躍起になっている。しかし、今、アラブの状況は非常に厳しいが、大局的には、彼らはいま西洋型民主主義、資本主義などの近代主義に変わり得る「ポストモダン」となる新しいモデルを探しはじめているようである。とくに、アラブ世界の熱い眼差しの先にあるのは、イスラームの国家実現である。

ムスリム同胞団は、政権を手に入れた。しかし、その後のシナリオが最も注目されることになる。ムスリム同胞は、長年待ちに待った自分たちの「ムスリム同胞団の国家実現」ができる時がやってきた。エジプトに限って言えば、ムスリム同胞団は、国をすべてムスリム同胞団一色にしようと躍起になっている。

ムスリム同胞団は、エジプトに「イスラームの共同体」と「アラブ共同体」をどう位置づけるのか、彼ら自身に対し、思想的な面での整理が求められている

4. 「アラブの春」の国難と日本の存在感

日本は、果たしてアラブの春とどのように向き合うべきなのか。ついこの間まで、この問いに対する答えを出すのは、さほど難しいことではなかった。しかし、今は違う。今日本にとってこの問いに対する「最適」な答えを出すのは難しいようである。

アラブ世界における政治的变化は国や地域による違いも大きいとはいえ、全体としてイスラーム主義勢力の存在感を増大させる結果となった今、

日本は、中東地域全体の従来の政治システムに対する外交政策とは違うものが求められている。

当然ながら、日本にとっても、この地域の安定化は、エネルギー安全保障の観点から死活的な重要性を持っている。また、こうした大変革が進展する状況の下で、アラブの春の国々の民主化と経済の安定化に向けたプロセスに的確な支援・関与を行って存在感を示すことは、国際社会全体での存在感の向上に直結する点においても重要なこととなる。

「アラブの春」の新生アラブたちは、革命発生後に残された課題と真正面から向かおうとしている。政治と経済の安定化、グッド・ガバナンス、人材育成の実現など試練や課題は山積みだが、公正な政治・行政運営の実現、人づくり、雇用促進・産業育成に重点を置いている新生アラブの国々には日本からの自立に対する支援への期待が高まっている。勿論、日本もアラブ側のこの期待に応えるべく、経済外交の推進に力を入れようとしている。そして、その進展によって日本と当該国との双方にとっての経済利益を高めるとともに、政治・経済システムの平和的変革へも貢献することを視野に入れているということである。

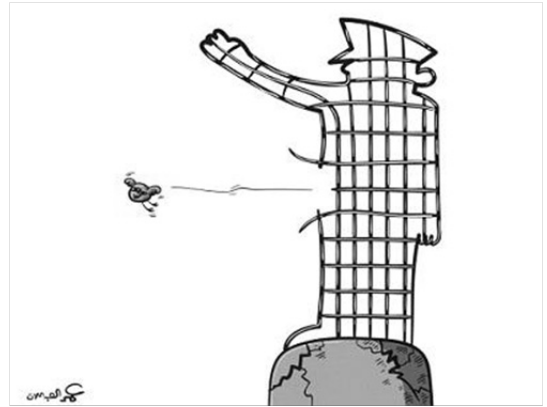
しかし、日本の存在感がもっとも問われるのは、その経済や民主化だけではない。それより、西洋型ではない成功モデルである日本の存在感が問われるのは、国民の自立意識の確立に対する支援だと思ふ。

自立心の強い人は自由で活力に満ち、依存心の強い人は他の要因に縛られ活力を失う傾向にある。アラブ世界の人々は独裁体制の下で、活力を失っていたが、その大きな要因の一つとして「自立心の欠如」が挙げられる。自立心を養うためには、個人の努力が必須だが、エジプトやチュニジア、リビアなどのようにこれまでのアラブ世界で行われる政治は個人が努力する環境を阻害するような政策を繰り返しており、自立心を失わせる環境を作り出してきた。

福沢諭吉が「一身独立して、一国独立なる」と

言っているように、真の独立国家とは、即ち国民一人ひとりの自意識そして国を思う気持ちが根底にあってこそ成り立つものであると言える。そのため、私たちアラブ人は自立心と独立心を取り戻すほかはない。

5. 一枚のイラストから



上の絵を見て何を連想するか・・・この一枚のイラストでは、アラブ人は、独裁のかごからやっと出られた小鳥のように描かれている。この風刺画は、2011年に最も優れた風刺画として若手風刺画イラストレーター最優秀賞に選ばれたものだ。書いたのは、若手のイラク人イラストレーターだ。

「アラブの春」からはもうすぐ2年になる。アラブの春によってもたらされた変化とその国事情は別として、革命はいろいろな意味で成功したに違いないが、本来の目的は未だ達成されないままである。本来の目的とは、長年にわたりあるとあらゆる強権を武器にしながら、国民の恐怖感を煽り、自分の支配権を押し続けてきた独裁者とその腐敗体制を変えることである。今や、エジプト人やチュニジア人、リビア人、イエメン人などの新生アラブ人は、体制を変えるには、大統領や旧体制を排除するだけで十分ではないことが分かった。そして、人々は、新生中東または新生アラブが誕生するには、新しい「エジプト人」、「チュニジア人」、「リビア人」などの誕生が必要不可欠である・・・と悟ったのではないだろうか。大統領

公開シンポジウム これからの日本とアラブ（中東／西アジア）

や旧体制を排除する「最初の革命」は終わった。
そして「次の革命」とは、アラブの春の国々の国民が自分自身に対し向き合っていく作業となるのではないか・・・

【報告 2 : 対訳】¹

A Revolutionary Train and the Arab Spring:

Japan's Presence amid National Struggles

Abdalla Almoamen

Introduction

The word “reform” does not necessarily mean “progress.” In other words, “to reform” and “to move forward” are not synonymous. At times, “reform” may even imply regression. It may come off as trite, but my point is that this is not a simple formula of things changing = things advancing.

We can undoubtedly regard 2011 as the year that signaled revolution in the Arab world.

Popular demonstrations that began in Tunisia leapt like a fire to Egypt, and then, one after another, spread to a number of neighboring Arab states. As the people demanded the downfall of their authoritarian regimes, their cries of “The citizens want to tear down the government!” were unstoppable. From all parts of Egypt came an unrelenting flood of people— young and old, students and businessmen, women and children, and even those with entire families in tow. The people, thrusting a “NO” into the face of their longstanding authoritarian regime, stood up with the desire for a democratic society. This was the arrival of the Arab Spring.

Watching those masses struggling, with their lives on the line and seeking change, I began to ask myself: What is the meaning of this revolution? What were these people fighting for, standing up for? The revolution represented the people protecting their own dignity. This was a revolution with dignity at stake.

What did the citizens win in these revolutions, and what must they achieve hereafter? Though the people were successful in removing the rulers who had installed their dictatorship, their authoritarian systems and corruption have yet to fall. It is as if, although the head of the snake has been cut off, the body is still moving. The reality is a far cry from the continually clamored demands of the Egyptian people to “tear down the government.” Then, how should the revolutions’ train of reform be driven forward? I would like to consider a number of issues,

including what role “Islamism,” while seen by its citizens with a degree of suspicion, should play, how this will impact people’s identity, and what connection will these countries have with Japan.

1. The Unseen Backstory and Its Influence

If there is one thing we can say, it is that these democratic movements that cascaded over the Arab world are not actually a first. When revolution was breaking out in Gamal Abdel Nasser’s Egypt of the 1950s, the surrounding Arab states experienced its impact and became active as well. In effect, such events could be regarded as a uniquely Arab phenomenon. It may be that people share the troubles of its neighboring countries, and being connected through these troubles is a particular feature of the Arab identity. This phenomenon is rather pronounced this time around as well.

Though Arab people are, in essence, an ethnic group that favors stability, it is also true that with the rise of a new generation has come an extraordinary increase in the number of young people expressing ambivalence toward stability. In these recent uprisings, with the authoritarian regimes being, however indirectly, the root cause for everything and with various situations building on one another, I believe that even the Arabs desiring stability, especially the Tunisians and Egyptians, entered a situation in which, if they did not act on their own volition, they could not have gone on living.

Another issue that should receive attention is that of information networks. In Egypt alone, various social classes are present. There is an upper class, a middle class, and a lower class, and though I suspect it is the same in other countries, people largely associate only with others of the same class. However, on the Internet, one need not concern oneself with the social class of another person. Thus, the Internet is an important forum of expression for Arabs precisely because it makes possible discussion among various social strata. This communication network that enabled virtual, cross-border discussion became a daily activity for the Arab people.

Both before and after the outbreak of the revolutions, the youth had cell phones with which they would chat with friends daily and always be aware of the latest news. Through such an extraordinarily robust exchange of information, the Egyptians, for example, were able to use the Internet to learn about the problems with which Jordanians were grappling. In effect, this meant a heightened understanding that these problems were not Egypt’s alone. Arabs realized that dictatorships existed not only in Egypt but also in other Arab countries. What only spurred on the Egyptians’ discontent was the stance taken by the international community, such as the United States, in what might be called a double standard in showing respect toward the anti-democratic regime of Mubarak while espousing democratic values. As such, the Arabs’

unease not only intensified vis-à-vis their own governments but also when they looked outside their own country.

From the 1970s up until the occurrence of the “Arab Spring” phenomenon, the governing regimes of Middle Eastern Arab states like Egypt, Libya, Tunisia, Syria, and Jordan were virtually all pro-American dictatorships. Accordingly, and so that internal strife would not break out among the pro-Western Middle Eastern Arab states, the United States pressurized these authoritarian regimes, while, if only indirectly, generously providing both political and economic support for those governments. Naturally, the dictatorships of many Middle Eastern Arab states took advantage of the support of the United States while at the same time solidifying their own authoritarian power.

2. From “the Republic of” to “the Islamic State of”

Needless to say, while the situation may differ from country to country, the potency of Islamism has grown leaps and bounds in these dramatic political changes in the Arab world brought about by the Arab Spring. In Tunisia, following the removal of the government of Ben Ali, the Islamist party of Ennahda acquired 90 seats in the constitutional assembly election (217 total) conducted in October 2011, becoming the party with plurality. Based on the results of the election, an interim cabinet was formed on December 23, appointing Ennahda Party’s al-Jabali as prime minister. Though there were alliances with other secular political parties, the Ennahda Party, which is affiliated with the Muslim Brotherhood, holds the main cabinet ministry positions and appears central to Tunisia’s politics as it goes forward.

In Egypt, which boarded second on the revolutionary train, the parliamentary elections were divided into three stages between late November 2011 and the latter half of January 2012. The result was that the Freedom and Justice Party, which is an Islamist party and an affiliate of the Muslim Brotherhood, secured 47% of the total 508 seats to become the party with plurality. In second place was the Islamist Nour Party of the Islamist bloc, the Salafists, making up 25%. If combined with the other Islamist political parties, such parties comprise about 75% of the total seats in parliament. The result is a resounding victory for the Islamist parties. Moreover, the victories for Islamic forces did not stop there. In Egypt’s elections for the Consultative Council, which is the upper house of parliament, conducted between January and February of this year, the Muslim Brotherhood’s Freedom and Justice Party along with the Islamist bloc’s Nour Party secured a combined 85% of the total seats—another overwhelming victory by the Islamist parties.

Moving on to other countries in which the Arab Spring has arrived, Islamists extended their influence to the constitutional convention elections conducted in Libya in July of this year, following the collapse of the Gaddafi regime. Libya's Muslim Brotherhood and other Islamists decided to establish a new party, the Justice and Construction Party, and elected as its head the Muslim Brotherhood leader Mohamed Sowan, who was held as a political prisoner under the Gaddafi regime.

The liberal party, the National Forces Alliance, secured 39 of the 80 party-list seats in the legislature. The Muslim Brotherhood-backed party, the Justice and Development Party, came in second with 17 seats. However, it is thought that the Islamist forces and their influence on the military will have a great impact on Libya's political trajectory, henceforth.

Although the wave of the Arab Spring has not yet reached Algeria, a look at the country's political trajectory likewise reveals the strength of Islamist forces that are in no way abating. While in Algeria, the political parties associated with the Muslim Brotherhood have continued to emphasize their stance, and maintained some degree of influence through their participation in a coalition government since 2004, it is predicted that Islamist forces will increase their seat count in parliamentary elections to be held this year.

3. The Arab Spring and Its Impact on Identity

Though there have been a wide range of changes brought about by the Arab Spring, there have also been, at times, many a scene that might cause one to ask, "What is an Arab?"

As an interpreter, I met many Arab and Japanese government officials and dignitaries. Several years ago, when charged with interpreting for Palestine's Mahmoud Abbas, I was able to ask him: "Will there come a day when the Arab world joins together?"

He answered, "There are some essential conditions to be met before that is possible. This is to say that Arabs themselves must be cognizant of the fact that they are Arabs." These words have stayed with me to this day.

I also had the following exchange with Hanamidori Yanagiya, who played the role of a student on the 2005 NHK educational program "Arabic Conversations," who asked me: "If you, Mr. Almoamen, were to assign an order to these three identities—Egyptian, Muslim, and Arab—how would you arrange them?"

If I remember right, I answered "1 - Muslim, 2 - Arab, 3 - Egyptian."

However, as I later mulled over my response, I realized it was not at all wise to rank those three identities. Because they overlap one another, they are not things that can be put in an

order.

I believe the number of identities a person carries is not just one. People undoubtedly have multiple identities and form a multilayered structure.

For example, to make several separate puzzle pieces form a single picture, one has to put certain pieces in certain places. The same is true for identities.

I do not think that mine is a simple structure, with my identity consisting only of “Muslim,” “Arab,” or “Egyptian” pieces. Similarly, the Arab world is not homogenous. The size and color of the pieces necessary to assemble a puzzle are somewhat different for each Arab state. Nevertheless, the completed picture is, without a doubt, the Arab world.

There are three types of identity that Arabs carry:

- 1.) Ethnic Identity ----- An identity in which one is a member of a larger Arab world. Arabs feel strongly the pride of being *Arabi* (Arabi = Arab) and a sense of camaraderie with fellow Arabs.
- 2.) Regional Identity ----- An identity in which one is a citizen of a nation. One feels great pride in being a citizen of one’s country, for example, being Masri (Egyptian) or Su`udi (Saudi).
- 3.) Religious Identity ----- An identity in which one is Muslim. This is an identity that transcends differences in national borders, skin color, or race. When another person is also Muslim, those two are brothers. When another country has Islam as its national religion, one feels a kinship with that country and its people. Of course, Christians also identify themselves as Christians. That identity, as is the case with Muslims, also transcends borders, skin color, and race.

Arabs live their day-to-day lives subconsciously embracing these three identities. Depending upon the education received and the environment and time period one is brought up in, how one chooses to be conscious of and prioritize these identities differs greatly.

Religious identity is the one element that has particularly stood out amid the changes brought about by the recent Arab Spring. By spurring the Muslim religious identity, Islamist forces have succeeded in growing their base of support to its highest level. Egypt serves as its perfect example. Needless to say, religion is indispensable in the lives of people in Arab society—it is the standard for behavior in the contexts of personal philosophy, marriage, work, children, human relations, neighborliness, and every other facet of life. Moreover, religion is incorporated into school classes as an academic subject, and Arabic is filled with expressions of Islamic origin. Not just words but also clothing, accessories, and home decoration are but a few

of the areas in which religion is strongly visible. In sum, the mark of religion can be seen everywhere in Arab society.

Clearly, the elections were not exceptions to this. There were various signs of religious influence. In reaction, a certain pattern of recognition became prevalent among citizens, choosing political alternatives that decide their countries' futures based on the priority of the identities they had formed up to that point. Thus, a suppressed Islamic religious identity broke free and gave rise to what at a glance seems to be the contradictory phenomenon of simultaneously advancing democratization and Islamization. The expectations concerning the direction of the Arab Spring seem to have been different between the Western and Arab world. As the Arab Spring occurred, everyone in the West associated it with democracy. Yet, what the Islamist forces immediately envisioned was the realization of an Islamic society. The difference appears to have been in the goals aimed by the West and the Muslim Arab world. While the goal for the Western world may have been democracy, it is clear that the goal of the Islamist forces is the realization of an Islamic society, and democracy is but a part of its process. This is the decisive distinction between the two worlds of the West and of Islam.

Now, the countries where the Arab Spring has arrived are eager to regain their former glory, with democracy and Islamic thought as the pillars. The current situation in the Arab world remains a difficult one. However, from a bigger perspective, it looks as though they are beginning to search for a new “postmodern” model to replace the modernism of Western style democracy and capitalism. In particular, what lies on the horizon for the Arab world is the actualization of the Islamic nation-state.

The Muslim Brotherhood assumed control of the reins of power. However, what follows will retain the major focus. For the Muslim Brotherhood, the time has arrived when the realization of a state run by the Muslim Brotherhood, which it had waited for so many years, has become achievable. With regards to Egypt, the Muslim Brotherhood is eager to unite the entire country under the Brotherhood.

The Muslim Brotherhood is tasked with reorganizing their own ideological platform, to decide how the separate collectives of Islam and Arab should be positioned within Egypt.

4. The National Struggles of the Arab Spring and the Presence of Japan

How exactly should Japan regard the Arab Spring? Until just recently, this question was not so difficult to answer. However, the circumstances have changed. It now seems more difficult for Japan to give the “optimal” answer to this question.

Though the political changes in the Arab world vary greatly by country and region, now that the presence of Islamist forces has increased as a whole, Japan is seeking a foreign policy that differs from that which pertained to the previous political systems of the Middle Eastern region.

The stability of this region undoubtedly holds a life-or-death significance from the standpoint of energy security for Japan as well. Under the circumstances that arise as these major social and political upheavals proceed, it will be important in asserting a presence through the support and participation in processes aimed at democratization and economic stability in the Arab Spring countries, as this would be directly linked with increased presence in the entire international community.

The Arabs reborn from the Arab Spring are currently attempting to face the issues that still remain since the outbreak of their revolutions. The ordeals and problems they face are a mile high, including political and economic stability, good governance, and the cultivation of human capital. Emphasizing on the implementation of fair politics and governance, human resources, employment, and industrial development, there is growing hope in the reborn Arab countries for Japan's support in achieving self-reliance. Japan is, of course, looking to boost the implementation of economic diplomacy in response to these hopes. This is done through the consideration for the accrual of economic benefits to both Japan and these countries through their progress, in addition to contributing to peaceful change in their political and economic systems.

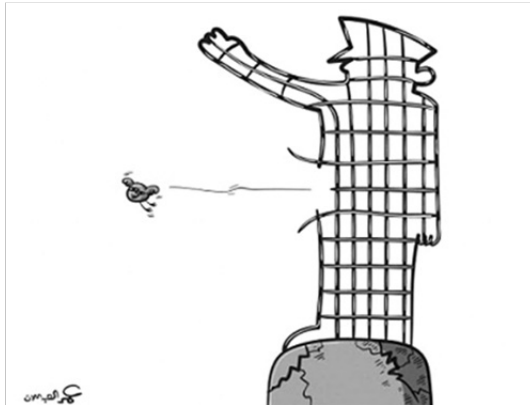
Still, what is most required of Japan is not only in economics or democratization. I think what is asked of Japan, a successful, non-Western model, is its support for establishing the citizens' awareness for self-reliance.

People who have a strong spirit of independence are free and full of vitality, and those who are dependent are bound by other elements and tend to lose this vitality. The people of the Arab world lost their vitality living under authoritarian regimes, a significant cause of this being the "lack of a spirit of independence." Individual effort is critical in cultivating this mentality, yet the politics conducted up until now in countries of the Arab world like Egypt, Tunisia, and Libya have repeatedly implemented policies that inhibited an environment in which individuals could exert themselves. This has created an environment that dissipated this spirit of independence.

Just as Yukichi Fukuzawa said, "Liberate oneself, liberate a nation," it may also be said that a truly independent nation is one formed with each and every citizen's independent consciousness and care for the country at its foundation. For that reason, we Arabs will have to,

before anything else, reclaim our spirit of independence and self-reliance.

5. From an Illustration



Looking at the above picture, what comes to mind? In considering this illustration, Arabs would imagine a small bird finally escaping the cage of dictatorship. This cartoon, drawn by a young Iraqi illustrator, was chosen for a young illustrators' excellence award as 2011's most highly regarded caricature.

It will soon be two years since the Arab Spring first began. Putting aside all the changes brought about by the Arab Spring and the nation-specific circumstances, though the revolutions have most certainly succeeded in many ways, the original goals have not yet been achieved. These original goals were to change from the dictators and their corrupt systems that for many long years had used the power of the state as a weapon, instilled fear in the citizenry, and furthered their own power of control. The new Arabs—the Egyptians, the Tunisians, the Libyans, the Yemenis, and others—now understand that it is not sufficient to simply remove presidents and old structures in order to change the system. People must surely have awakened to the fact that in order for a new Middle East and Arab world to be born, the birth of a new “Egyptian,” a new “Tunisian,” and a new “Libyan” is essential. The “First Revolution” that rejected the old systems and heads of state has reached its conclusion. The “Next Revolution” must be the work of citizens in the Arab Spring countries who must confront themselves.

Note

1 The translation was provided by Maruzen at the request of the symposium coordinator.